

# 巻頭所感

学習支援・教育開発センター所長 廣安知之

同志社大学の学習支援・教育開発センターには文字通り二つのミッションがあります。

一つ目は、学生の主体的な学びを全学的に支援する取り組みです。現在、その活動の中心になっているのがラーニング・コモンズです。今出川のラーニング・コモンズは2013年に、京田辺のラーニング・コモンズは2018年にオープンしました。ラーニング・コモンズの計画当初、個人的には本当に使われるのだろうか？コモンズ内で居眠りなどする学生が多発したらどうするのか？などと心配したものでした。しかしながら、本当に反省します。そのような心配は杞憂でした。ラーニング・コモンズがオープンしてみるとそのスペースはやる気で満ちた学生で溢れたのです。まだ、ラーニング・コモンズにいらっしゃったことのない方は是非その雰囲気を経験していただきたいと思います。私は京田辺キャンパスの教員なのですが、京田辺キャンパスのコモンズに出かけてみると、座席が足りなくて入れない学生がいたほどでした。教員は得てして成績の悪い学生、やる気の無い学生に意識が向いてしまうものですが、この空間に存在するやる気に満ちた学生を発見する経験は驚くべきものでした。もう少し、これらのやる気のある学生に向き合う必要があると感じさせられます。

このように活気のあるラーニング・コモンズでしたが、秋口に心配になったのは、毎年冬に発生するインフルエンザの影響でした。これほどまでに利用者が多いと、この場を介してインフルエンザが蔓延することもありうるだろうと感じたのです。幸いインフルエンザは流行を迎えませんでした。新型コロナウイルスと言う新たな感染症のニュースが入ってきました。この新たな感染症が、コモンズで蔓延したらどうなるのだろうか心配し、検討を始めました。ラーニング・コモンズを閉めるなどの検討を行う必要がでてきたら日本も大変なことになっているよとおっしゃる先生もいらっしゃいました。残念ながら、現実にはそのような事態になってしまいました。一方で、ラーニング・コモンズの新型コロナウイルスへの対応はスムーズにできたのではないかと考えています。

これからは新型コロナウイルスとどのように付き合うのが課題です。学生の健康を一番に考えながら、どうやって、アクティブ・ラーニングを実行し、やる気のある

学生が顔と顔を突き合わせて彼ら彼女らの意欲を高め、勉学に勤しんでもらう環境を作るのかを考えなければなりません。1つやらねばならないのは、科学的に定量的に学習環境を整備するということです。例えば、CO<sup>2</sup>センサーを配備し、IoTおよびAIの技術を利用して、実質的に換気が行えている場を作るのです。

センターのもう一つのミッションが、教員のファカルティ・ディベロップメント(FD)の支援です。このFDについても、新型コロナウイルスが影響しました。同志社大学では2020年度春学期の授業は非対面で行われました。そのため、ほとんどの先生方がこれまでのやり方を変え新しいやり方を強いられることとなり、強制的にディベロップメントさせられたわけです。私の所長としての在任中、この支援が不十分でみなさんにご迷惑をおかけしました。しかしながら、幸い、同志社大学には自由かつ個人の努力を惜しまない学風がありました。みなさんの努力で、困難に立ち向かえている・立ち向かえたと思います。

新型コロナウイルスの影響のある状況では、どのように大学が十分に準備しても個々の理解と努力がなければうまくいきません。今後、まだまだコロナウイルスと付き合いながら、教育・研究を進めていく必要があり、さらに困難に直面することが予想されます。同志社大学のこれまで培ってきた学風がそれを乗り越えていく鍵になると思います。学習支援・教育開発センターは、その全学的な取り組みの中で、学生や教員、職員のみなさんを支援する使命があります。